

( 続紙 1 )

京都大学	博士 (教育学)	氏名	谷 美奈
論文題目	「書く」ことによる学生の自己形成 —文章表現「パーソナル・ライティング」の実践を通して—		
<p>(論文内容の要旨)</p> <p>本論文は、大学教育において主流となっているアカデミック・ライティングに対置される「パーソナル・ライティング」という新しい文章表現の可能性を、理論的・実践的に追求した論文である。「パーソナル・ライティング」とは、自己の経験に基づいて書かれたエッセー形式の作品、およびそれを生み出す表現行為を指す。著者のパーソナル・ライティング実践では、「シチュエーション」(=体験や記憶を読者が追体験できるように、生き生きと具体的かつ丁寧に書く)と「コンストラクション」(=構造的な工夫)に注意して書いた上で、「掘り下げ」(=「悲しい」「嬉しい」といった主観語ですましがちな感情がどのようなニュアンスをもつのかを、できるだけ分節化して再現すること)と「とらえ返し」(=そのときその感情がなぜ自分に起こったのか、なぜ今もその思いが記憶の底に残り続けているのかを問い、記憶の意味を書き手である立場で考え直そうとすること)を通じて、自己省察を深めることがめざされている。また、作品朗読発表会と ZINE (作品集) の作成を通じて、他者と表現行為を交換することも重視されている。</p> <p>本論文は、序章・終章と 5 つの章からなる。序章では、日本の大学における文章表現教育の現状と課題が論じられ、次の 5 つの問いが提示される。①パーソナル・ライティングとは何か (パーソナル・ライティングと Personal Writing との違い)、②アカデミック・ライティングが主流のなかで、パーソナル・ライティングを実践することの意義はどこにあるのか、③パーソナル・ライティングではどのような指導がなされるのか、④パーソナル・ライティングを通じて学生はどのように変容するのか、⑤パーソナル・ライティングは学生の発達 (=自己形成) にとってどのような意味をもちうるのか。</p> <p>「第一章 米国における文章表現教育の変遷と Personal Writing への着目」では、米国のピーター・エルボウらの唱える Personal Writing との異同が論じられている。両者は多くの類似性をもつものの、Personal Writing では自由に記述することを中心にしてきているのに対し、パーソナル・ライティングは、固有な自己を発見するという自己省察的な思考に重きをおいているという点で異なる。</p> <p>「第二章 『書く』ことの現代的意義」では、現代の大学生において、「自己」と「社会」に対する起点となるべき〈私〉がうまく機能していないという問題認識に基づき、「書く」ことを通じて〈私〉を考え〈私〉を見つめることの必要性が述べられている。</p> <p>「第三章 目標達成へのプログラム」では、パーソナル・ライティングの構成要素 (「エッセー」というジャンル、「作品」化、「掘り下げ」と「とらえ返し」、表現行為の交換) が説明され、京都精華大学での 1 年間の実践 (「私がいた場所」「感覚を伝える」など前後期あわせて 8 クールのテーマ、および指導プロセス) について語られている。</p> <p>「第四章 パーソナル・ライティングの成果物と教育効果の検討」では、4 人の学生の作品の変化が、自己認識、表現者としての自己形成という観点から分析されている。また、クラス (約 60 名) の学生の得点変化と自己評価アンケート結果から、自己認識の深化がクラスの学生全体にみられたことが示されている。</p> <p>「第五章 自己形成におけるパーソナル・ライティングの意味」では、元学生 (当事者) 15 名への半構造化インタビューおよびライフストーリー・インタビューが実施</p>			

され、KJ 法により、「パーソナル・ライティングが自己形成にどのような意味をもたらしたか」について、中カテゴリーと 5 つの大カテゴリー（自分の居場所、自己表現、他者の応答、自己の軌跡、自分のモチーフ）が抽出されている。

以上の検討をふまえ、終章では、最初の 5 つの問いに対して答える形で、パーソナル・ライティングが、まず〈私〉を書くことから始めて、自己のとらえ返しによる主体の立ち上げをもたらすとともに、単なる自己の表現にとどまらず、他者、社会へと射程を拡張するものであることが示された。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、「パーソナル・ライティング」という新しい文章表現の可能性を、理論的・実践的に追求した論文である。「パーソナル・ライティング」とは、自己の経験に基づいて書かれたエッセー形式の作品、およびそれを生み出す表現行為を指す。著者のパーソナル・ライティング実践では、「シチュエーション」と「コンストラクション」に注意して書いた上で、経験の感覚の「掘り下げ」と経験の意味の「とらえ返し」を通じて自己省察を深めること、また、作品朗読発表会や作品集の作成を通じて他者と表現行為を交換することが重視されている。

本論文は序章・終章と5つの章からなり、5つの問い——パーソナル・ライティングとは何か、パーソナル・ライティングを実践することの意義はどこにあるのか、パーソナル・ライティングではどのような指導がなされるのか、パーソナル・ライティングを通じて学生はどのように変容するのか、パーソナル・ライティングは学生の自己形成にとってどのような意味をもちうるのか——をめぐって展開する。本研究でとられている主たる方法は、アクションリサーチによる実践的アプローチである。具体的には、著者が創出したパーソナル・ライティングの実践の内実と、それがもたらした学生の変容が、作品の分析と評価結果の変化(第三・四章)、および元学生への聞き取り調査(第五章)によって明らかにされている。このような方法を通じて、著者は、パーソナル・ライティングが、〈私〉を書くことから始めて、自己のとらえ返しによる主体の立ち上げをもたらすとともに、単なる自己の表現にとどまらず、他者、対象世界へと射程を拡張するものであるという結論を導いている。

本研究の意義として、以下の点を挙げるができる。

第一に、日本の大学教育においてパーソナル・ライティングの概念を初めて提示したことである。パーソナル・ライティングは、アカデミック・ライティングに対置され、それを補完するものとして位置づけられている。両者の対比は、J. S. ブルーナーの論理-科学モードとナラティブ・モードという2つの思考様式の対比にも通じるものである。また、米国のピーター・エルボウらが唱える Personal Writing との比較を通じて、両者の類似性ととともに相違点(エルボウらの Personal Writing が学生に自由に表現させることを強調するのに対して、著者のパーソナル・ライティングは自己省察的思考と他者・対象世界への認識の拡張を強調すること)も明らかにされている。現在、日本の大学教育における文章表現教育は、ほとんどがアカデミック・ライティングであるが、そこにパーソナル・ライティングという新機軸を示したことには価値がある。

第二に、著者の創出したパーソナル・ライティングの実践の内実(テーマ、指導プロセス、評価等)と、それがもたらす学生の変容を具体的に描き出したことである。これは、前任校の京都精華大学での1年間の実践、4名の学生の作品とその変遷、クラス全体(約60名)の得点の変化、卒業数年後の元学生15名へのライフストーリー・インタビュー等によって浮き彫りにされている。たとえば、「私がいた場所」というテーマに対して、学生が高専時代の自分を綴った「トイレという場所」という作品など、いくつもの作品とその変遷は、アカデミック・ライティングとは異なるパーソナル・ライティングの特徴を生き生きと映し出している。また、当事者である元学生へのインタビューはKJ法によって分析され、自己形成におけるパーソナル・ライティングの意味が、自分の居場所、自己表現、他者の応答、自己の軌跡、自分のモチーフという5つの大カテゴリーとその下位に位置づく中カテゴリー、ラベルによって重層的に抽出されている。

以上のように、本論文は、わが国の大学教育において、パーソナル・ライティングの理論と実践を初めて本格的に論じた論考として高く評価できる。

口頭試問では、実践がきわめて興味深く、日本の大学教育への示唆も大きいことが称賛される一方で、理論的な精緻化にやや弱さがみられることも指摘された。具体的には、エルボウらの **Personal Writing** との比較による著者のパーソナル・ライティング概念や実践のオリジナリティの明確化、実践を可能にした条件の抽出、大学教育におけるアカデミック・ライティングとの相互補完性の検討、質的な事例研究としての方法論の彫琢や他大学への適用可能性の検討などが、課題として示された。だが、著者自身もこれらの課題はよく認識しており、今後の研究の発展に生かしていくことが期待できる。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。また、令和2年5月8日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、（期間未定）当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日：                    年            月            日以降